

## 「オレンジ会」の現況と今後の課題(2)

ー過去5年間の活動実績をもとにー

田中 信利 税田 慶昭

Orenjikai as a therapeutic activity for adults and children with handicap(2)

TANAKA Nobutoshi and SAITA Yasuaki

Orenjikai is a therapeutic activity that is served for adults and children with handicap. It has been held once a month since 1990. The aim of this paper is to report this activity for these five years and discuss how it should be managed hereafter.

はじめに

「オレンジ会」は、障害のある大人や子どものための心理的援助を目的とした訓練会である。平成2年10月以降毎月1回開催され、平成19年12月時点で163回を数えるまでに至っている。前回の報告（田中・森永、2003）では、平成8年度から平成14年度までの活動を述べたが、今回は、その後の平成15年度から平成19年度（第106回～第163回）までの5年間の活動実績をもとにオレンジ会の活動状況を概観し、更に活動内容や運営のあり方を含めた今後の課題について考えてみたい。

### 1 オレンジ会活動の概要

本学で開催されているオレンジ会は、障害をもつ対象者への心理的援助として動作法を採り入れている。動作法は元来、脳性マヒの動作不自由を改善するために考案された我が国独自の心理教育的アプローチであり（成瀬、1973）日本の肢体不自由教育の現場に広く普及している。このアプローチは基本的に、援助者（以下、トレーナー）と被援助者（以下、トレーニー）とのマン・ツー・マンによる援助形態を採っている。トレーナーは、動作法場面でまずトレーニーの姿勢動作の特徴や問題点を考慮して必要とされる動作課題を選定する。そして、トレーニーを動作課題に誘導し、言語的・動作的に働きかけながら、トレーニーが不当緊張の自己弛緩や適切な自発動作を遂行できるように促している。オレンジ会では、本学学生がトレーナーの役割を担当しているが、動作法の臨床経験が浅い者が多いので、本学教員が指導者（以下、スーパーヴァイザー）としてトレーナーとトレーニーのペアを数組ずつ担当し、トレーニーの見立てや援助の仕方についてトレーナーへの指導や助言を行っている。オレンジ会のスーパーヴァイザーは、基本的には本学教員がその任にあっているが、参加トレーニーが多い場合には、近隣の臨床心理士や特別支援学校教諭にも協力を仰いでいる。

最近では、動作法が自閉症やADHDといった発達障害や、統合失調症等の精神障害へも適用されるようになり、心理臨床のあらゆる領域に浸透し始めている。このような流れを受けて、オレンジ会の参加者も当初は脳性マヒが主であったが、発達障害の参加者が増え始めている。そのため、参加トレーニー数に見合うトレーナーの人員確保が難しくなったり、会場の収容スペースが手狭になる等、様々な問題点が生じてきた。そこで、それまでの土曜日午後開催を見直し、第130回（平成16年9月）より、午前の部（年

「オレンジ会」の現況と今後の課題(2)

少者対象)と午後の部(年長者対象)の2部構成として実施している。しかしながら、2部構成による開催でも、時には運営が難しいほどの参加者が集まることがあり、今後、更に打開策を講じる必要性が求められている。

2 オレンジ会活動の実際

オレンジ会は、原則として毎月1回土曜日に開催している(但し、8月と3月はお休み)。

スケジュールに関して、2部構成開催となった第130回の前後では、共に動作法セッション2回を中心としたプログラムではあるものの、いくつかの変更点がある(表1、表2参照)。

表1 オレンジ会のスケジュール(第129回まで)

12:30~13:00	事前準備
13:00~13:10	受付
13:10~13:15	はじめの会
13:15~14:15	動作法セッション
14:15~14:40	休憩(おやつ)
14:40~14:55	集団療法
15:00~16:00	動作法セッション
16:00~16:05	おわりの会
16:05~16:30	記録記入
16:30~17:00	ミーティング
17:00~18:00	勉強会

表2 オレンジ会のスケジュール(第130回以降)

午前の部(年少者対象)

9:30~10:00	事前準備
10:00~10:10	はじめの会
10:10~10:50	動作法セッション
10:50~11:20	休憩(おやつ)
11:20~12:00	動作法セッション
12:00~12:10	おわりの会
12:10~12:30	記録記入
12:30~13:00	ミーティング

午後の部(年長者対象)

14:00~14:10	はじめの会
14:10~15:00	動作法セッション
15:00~15:30	休憩(おやつ)
15:30~16:20	動作法セッション
16:20~16:30	おわりの会
16:30~16:50	記録記入
16:50~17:20	ミーティング
17:20~17:40	後片付け

まず、動作法セッションの時間に関して、当初は1時間としていたが、2部構成開催後に午前の部を40分間、午後の部を50分間にそれぞれ時間を短縮した。現時点では、この時間短縮による問題や弊害はないように見受けられる。むしろ、就学前児にとって1時間はやや長すぎてセラピーが間延びする感があったので、午前の部の40分間への短縮は適切であったかもしれない。

また、当初は集団療法を実施していたが、2部構成開催後はスケジュールから外すことにした。障害をもつ幼児や児童にとって集団療法や集団遊びが、子どもの社会性・自発性・主体性を育む役割を担っており(清水, 1987)、その必要性は否定できない。しかしながら、オレンジ会が動作法による発達援助を主眼とした活動の場であり、また参加している就学前のトレーニーが日頃、通所施設で集団的な活動による療

育を受け、更にその保護者たちも動作法によるマン・ツー・マンの関わりを求めていることから、時間的制約もあって集団療法を取りやめることにした。その代わりに、動作法セッション場面で、動作法課題への導入段階として、皆で輪になって手遊び歌をやる等の取り組みを適宜採り入れながら、集団遊び的な要素も盛り込むようにしている。

当初は1日のスケジュールの最後に勉強会の枠を設けていたが、2部構成開催後は、午前10時からの開催（実際は準備のため9時過ぎから）という長丁場のため、午前の部と午後の部の双方に従事するスタッフにはかなりの負担となるし、また午前の部だけに参加したトレーナーが動作法の理論や技法を勉強できないという不具合も生じるため、スケジュールから外すことにした。その代わりに、別の日に時間を設けて定期的に勉強会を開催し、実習形式での実技指導を中心とする研修を実施している。

### 3 オレンジ会活動の実績

次に、過去5年間でのオレンジ会の活動実績の推移を数量的に記述する。尚、開催回数は、平成15年度から平成18年度までが毎年10回ずつ、平成19年度は12月時点までのデータのため7回であった（平成19年の7月月例会は、台風のため中止とした）。

#### ① 参加延べ人数

参加延べ人数を年度毎に示したのが、図1である。平成15年度の参加延べ人数が30名であったのに対し、平成16年以降は毎年100名前後を推移している（但し、平成19年度は60名弱であるが、開催回数が7回であることを考慮すると、年度末には例年に近い数になると思われる）。前回の報告では、参加人数が平成9年度から漸減傾向にあると述べたが、平成16年度からその様相が異なってきている。その理由として、後述するように、平成16年度及び平成19年度に新規参加者が多かったことが挙げられる。

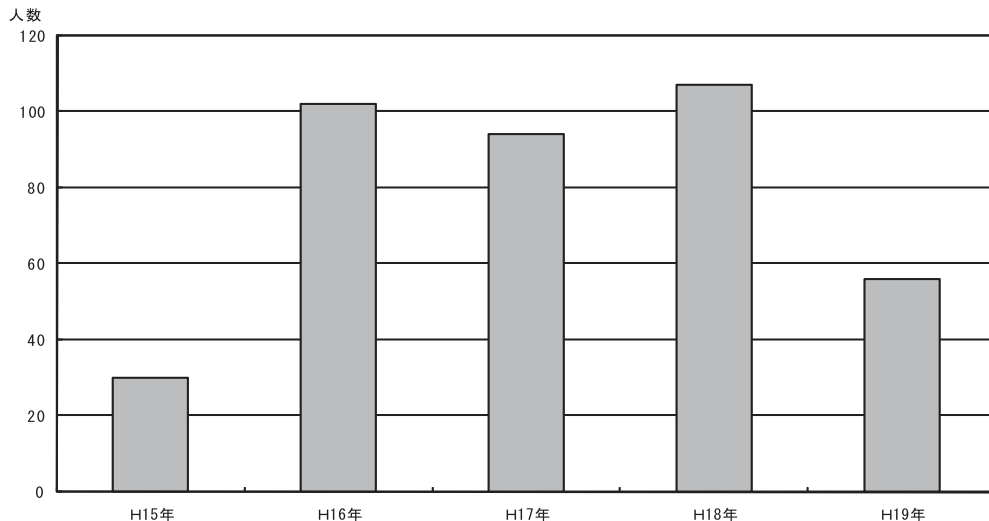


図1 参加延べ人数

#### ② 参加実人数

参加実人数を年度毎に示したのが、図2である。平成15年度が6名という少ない会員数であったが、平成16年度以降は毎年20名前後を推移しており、参加延べ人数の結果と相応している。

「オレンジ会」の現況と今後の課題(2)

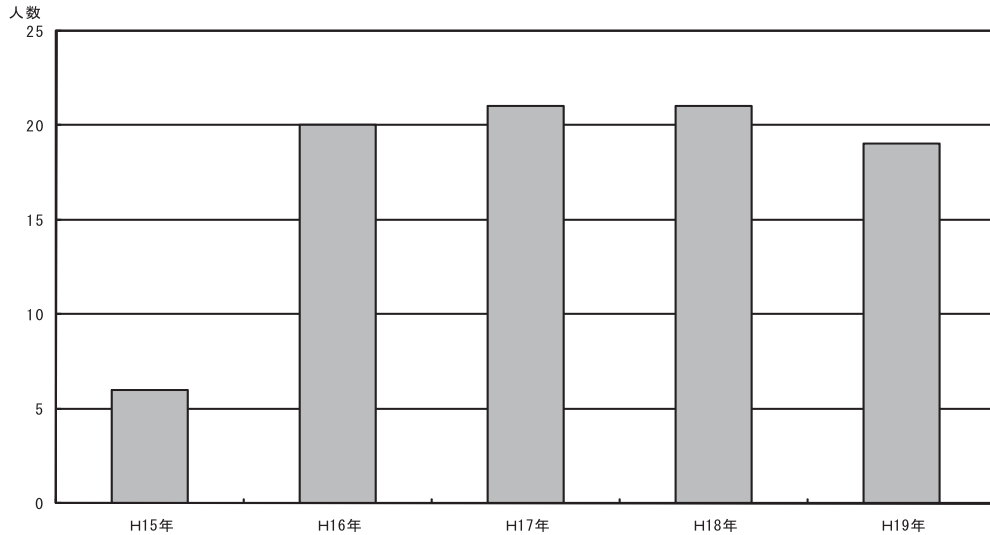


図2 参加実人数

③ 月平均参加人数

月あたりの平均参加人数を年度毎に示したのが、図3である。平成15年度は3名であったが、平成16年度以降は10名前後を推移している。このような参加者数の増大のため、前述したように、平成16年9月からオレンジ会開催が午前の部と午後の部の2部構成となっている。

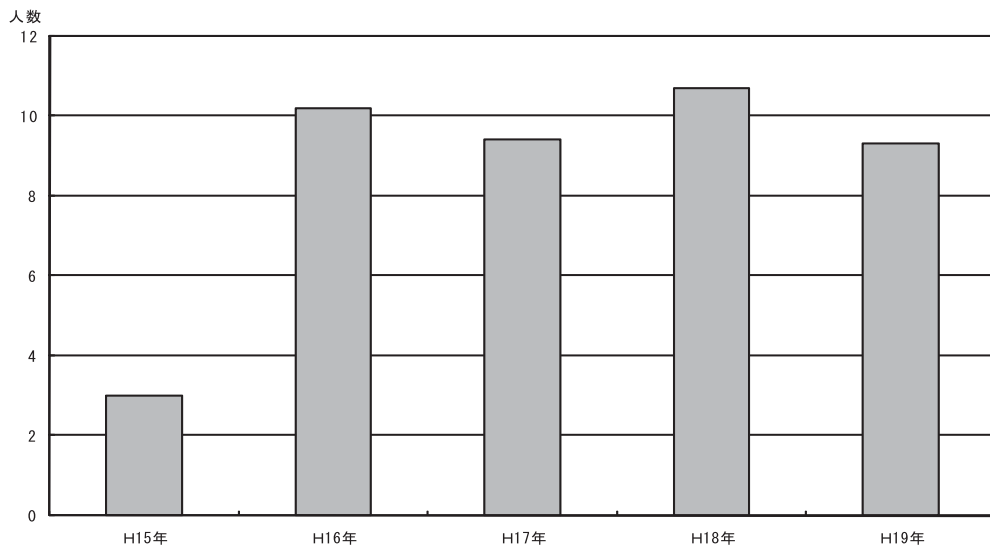


図3 月平均参加人数

④ 新規参加人数

新規参加人数を年度毎に示したのが、図4である。平成16年度及び平成19年度には新規参加が多く、それ以外の年度は僅少もしくは皆無という具合に、年度によってかなりのばらつきが見られる。平成16年度

の新規参加に関しては、動作法が障害児のための発達援助法としてマスコミで紹介され、そこから本学のオレンジ会を知って来談したものである。また、平成19年度の新規参加の場合では、オレンジ会の既会員からの紹介による見学・参加というのが大半である。平成16年度と平成19年度のいずれでも、他の療育機関（障害児通園施設等）で知り合った仲間と一緒に連れ立って来談しており、それが多くの新規参加者となっている。そして、これら新規参加者のほとんどが就学前の幼児であり、動作法未経験者である。

一方、北九州市近郊で長年に亘って行われていた動作法訓練会が廃止となったためにオレンジ会へ移ってきたケースや、幼少の頃に動作法による療育を受けていた者が成人した後に再び動作法を受けようとオレンジ会を来談したケースのように、過去に動作法のセラピー経験がある者もいる。

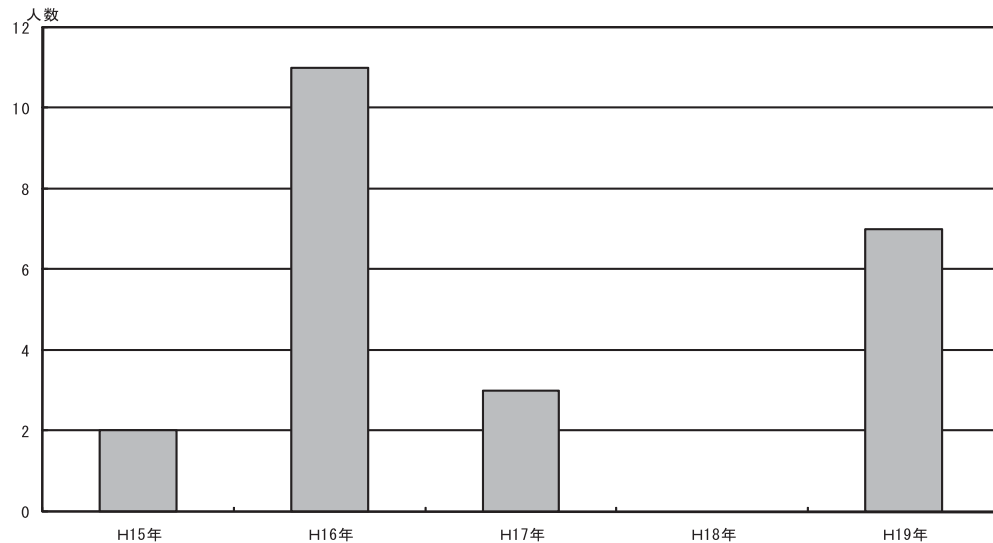


図4 新規参加人数

#### ⑤ 年間あたりの平均参加回数

年間あたりの平均参加回数を年度毎に示したのが、図5である。年度にほとんど変わりがなく1年間で5回前後の参加となっており、オレンジ会参加者が年間開催数の半分に参加していることになる（この場合も、平成19年度開催数が7回のため、他の年度よりも低い値となっているが、年度末には例年に近い数になると思われる）。しかしながら、データとして表示していないが、参加者間でかなりのばらつきがあり、ほとんど皆勤というケースもあれば、毎年1回のケースもある。一概には言えないが、参加回数にばらつきがある背景には、トレーニーの年齢（就学前もしくは就学中）、オレンジ会以外の治療的専門機関への受診の有無、就学後の就労の有無があるように思われる。

#### ⑥ 障害の種類

トレーニーの障害の種類を示したのが、図6である。当初は脳性マヒを中心とする肢体不自由が主であったが、年度を追う毎に知的障害や発達障害の占める割合が高くなっている。また、発達障害のなかには、自閉症、アスペルガー障害、学習障害、ADHDが含まれ、参加者の構成が多様になってきている。

知的障害や発達障害の割合が多くなっている理由として、発達障害への心理的援助を実施する近隣の専門機関の事情が影響していることが挙げられる。北九州市には、総合療育センターを始めとする様々の療育通園施設があるが、知的障害や発達障害の子どもをもつ保護者のニーズに必ずしも見合っていないよう

「オレンジ会」の現況と今後の課題(2)

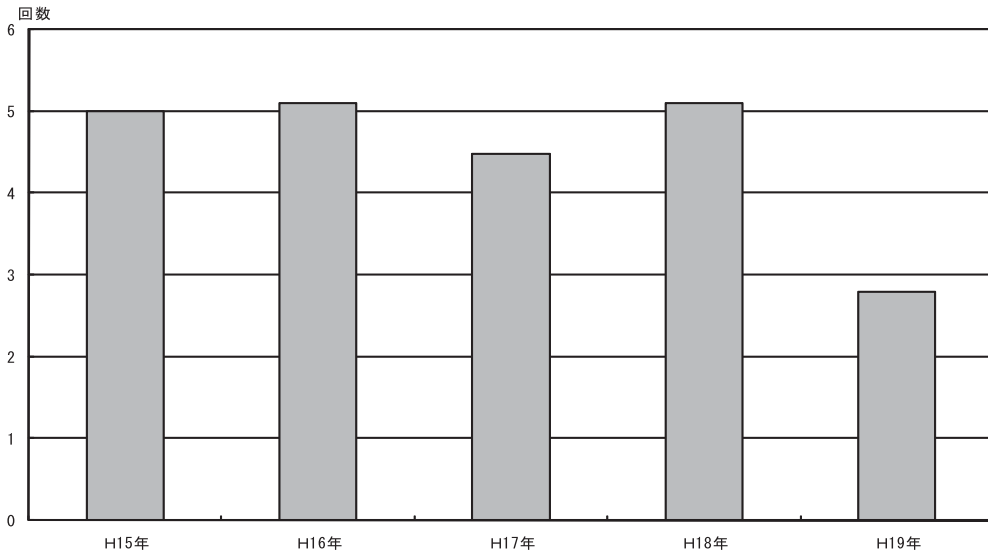


図5 平均参加回数

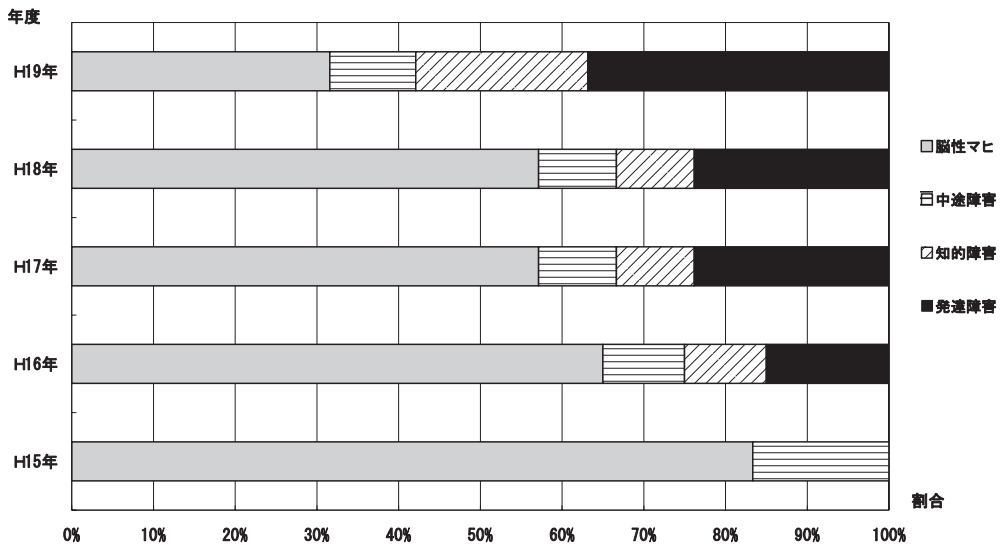


図6 障害の種類

に思われる。例えば、オレンジ会に参加する発達障害や知的障害の就学前児は或る通園施設に通っているが、そこでの療育は主として集団形式によるものである。しかしながら、一概に発達障害といっても多様な障害群であり、また子どもの発達水準も一様でなく主訴や問題行動も多岐に亘っている。そのため、集団的アプローチだけでなく、個別のアプローチが必要とされるが、人員配置等の現実的制約もあつて、その導入が難しいようである。そのため、個別のアプローチを望む保護者が、動作法のマン・ツー・マン形式によるアプローチを実施するオレンジ会に参加している。

また、オレンジ会の参加者には、いわゆる軽度発達障害で、普通小中学校の通常学級に在籍する者もい

るが、このようなケースを受け容れる治療的専門機関がきわめて僅少である。実際、オレンジ会と同様に動作法を採り入れている「ミツバチの会」(北九州市八幡西区)でも、特別支援学校だけでなく、普通小学校の通常学級や特別支援学級に在籍する児童の参加者或いは参加希望者が増えており、この領域における対象者のニーズへの行政的対応が早急に求められるところである。

#### 4 今後の課題

ここまで過去5年間に亘るオレンジ会の活動状況を述べてきたが、その間、参加トレーニーの人数が増加し、トレーニーの障害も多様となる等、その様相にかなりの変化がみられるようになってきた。それに対して運営側も対応策をその都度講じてきたが、いまだ検討すべき点があり、必ずしも十分とは言えない。そこで、現在のオレンジ会が抱える問題点を整理しながら、今後取り組むべき課題について考えてみることにする。

オレンジ会は現在、学生トレーナーがそれぞれ1人のトレーニーを担当してペアを作り、そしてスーパーヴァイザーが複数のペアを担当する班構成のシステムであり、集団形式の中にマン・ツー・マンの個別形式が存する入れ子構造となっている。基本的には、トレーナーがトレーニーに動作法を施行している間に、スーパーヴァイザーが巡回しながら指導することになるが、トレーナーの力量やトレーニーの状態によっては、スーパーヴァイザーが特定のペアに掛かりきりとなって、他のペアの指導まで手が回らなくなることもある。このような場合にトレーニーの数が多くなると、スーパーヴァイザーが担当するペアの数も多くなり、トレーナーへの指導体制が不十分となってしまう。そのため、スーパーヴァイザーが担当するペアを一定数で抑えるために、近隣のスーパーヴァイザーに協力を仰いでいるが、その確保がきわめて難しいのが実情である。従って、スーパーヴァイザーの確保が急務の課題となっている。

トレーニーの障害が多様化すると、当然のことながら、トレーニーもしくはその保護者のニーズも多様となってくる。現時点では、インテーク時にトレーニーもしくは保護者にインテークシートを渡して診断、生育歴や主訴等を書き入れてもらい、そのインテークシートをもとに話し合いながら、それぞれのニーズを明確にし、オレンジ会でのセラピー方針を立案している。しかしながら、スーパーヴァイザーが複数のペアからなる班を担当し、他のペアのセラピーを指導しながら並行してインテークを実施しているため、インテークのための時間が不足している。そのため、それを補うものとして、休憩時間を利用してトレーニーに関する情報収集を行っているが、いまだ十分とは言えない。従って、オレンジ会のこれまでのスケジュールを再度見直し、インテークや保護者との面談のための時間を組み込む必要があると思われる。

また、上述のスーパーヴァイザーの確保と同様に、トレーナーの確保とその技術向上という課題もある。現在は、臨床心理学教室と発達心理学教室のゼミ生がトレーナーの役割を担っており、トレーニーの数に見合うだけの人員はあるものの、それぞれの事情によってゼミ生がいつもすべて参加している訳ではない。そのため、本来ならばトレーニーとトレーナーとのペアを一定期間固定させることが、とりわけ発達障害のケースの場合には必要とされるが、実際はペアを固定させることが難しくなっている。今後は、トレーナーとしての意識付けを含めた学生の育成をどのように図るかを検討する必要があるだろう。

この他にも、動作法とプレイをどのように併用しながらセラピーを施行するかというセラピー内容や、オレンジ会を実施しているプレイルームの物理的環境等、ソフト、ハード両面において検討すべき課題があるが、これらひとつひとつに取り組みながら、地域貢献と学生の臨床教育の場としての重要な意義をもつオレンジ会を更に発展させていきたいと考えている。

#### 引用文献

成瀬悟策 1973 心理リハビリテーション 誠信書房。

「オレンジ会」の現況と今後の課題(2)

清水良三 1987 集団療法 九州大学教育学部附属障害児臨床センター障害児臨床シンポジウムVol.2  
「心理リハビリテーションキャンプ」45-52.

田中信利・森永今日子 2003 障害児発達援助活動としての「オレンジ会」の現況と今後の課題 北九州  
市立大学文学部紀要(人間関係学科)第10巻 99-105.